顔面把手と釣手土器

―伊勢原市三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手を基点として―

中村　耕作

はじめに
1. 三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手　　2. 類似する装飾とその分布
展望：顔面把手と釣手土器

はじめに

有孔鍔付土器・釣手土器・器台。これらは、縄文時代中期の勝坂式土器様式の中で定着した新しい土器形式である。小林達雄（1981・1982）は釣手土器など非飲食用の形式の出現や土器の炉・埋甕・副葬品への転用をもって、「応用の時代」に入る「縄文土器の第二革命」と評価している。

釣手土器はランプと想定されているが、竪穴から出土する例が多く、しばしば火災住居に石棒などを伴って検出され、事例数の少なさもあって、象徴的な儀礼具として位置づけられている（藤森 1965）。また、その分布も限定されており土器形式の中でも特異な位置にある。すなわち、前半期の藤内式期～曽利Ⅰ式期においては、甲信地方から関東西南部に約 40 点が知られているのみであり、曽利Ⅱ式期以降には数を増し形態の上でも地域的なバリエーションを増やしていくものの、分布は関東西部から東海・北陸までに限られる（宮城 1982、綿田 2002、中村 2008b）。動物装飾や顔面装飾がしばしば付されるが、前半期には特にその比率は高い。その出現過程は未だ明らかではないものの、研究の当初より顔面把手[註1]との形態の類似が指摘されている（鳥居 1924）。また、釣手土器の頂部にしばしば見られる顔面装飾は、顔面把手を受け継ぐものとする見解がある（蜂屋 2008）。

顔面把手もまた勝坂様式を特徴付ける要素であり、釣手土器の出現期である藤内式の後半～井戸尻式末期に最盛期を迎える。この間、数の上では顔面把手が圧倒的に多いものの両者は並存し、分布範囲もほぼ重なる。顔面把手の大多数は把手部のみで検出され、器体と異なった取り扱いがなされた可能性が高い（藤森 1968）。また器体を伴う事例は、その多くに底部欠損が認められ、土坑中からの出土が目立つ（渡辺 1995）。

筆者は、こうした象徴性の高い土器形式が地域社会の儀礼の上でいかなる位置づけにあったかについて関心を抱いてきたが（中村 2008a・c）、釣手土器の問題を検討するにあたり、まず器形・装飾の起源と目される顔面把手との具体的な関係性を検討すべきと考えた。しかしなが

ら、バリエーション豊富な顔面把手自体、系統・地域性などはほとんど検討されておらず、体系的な比較検討にはなお時間を要する。そこで本稿では、伊勢原市三之宮比々多(ひびた)神社所蔵の顔面把手の再紹介を兼ねて、ごく一部の類型について装飾・分布の2点から接近を試み、顔面把手と釣手土器の関係の一端を検討していくこととしたい。

1. 三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手

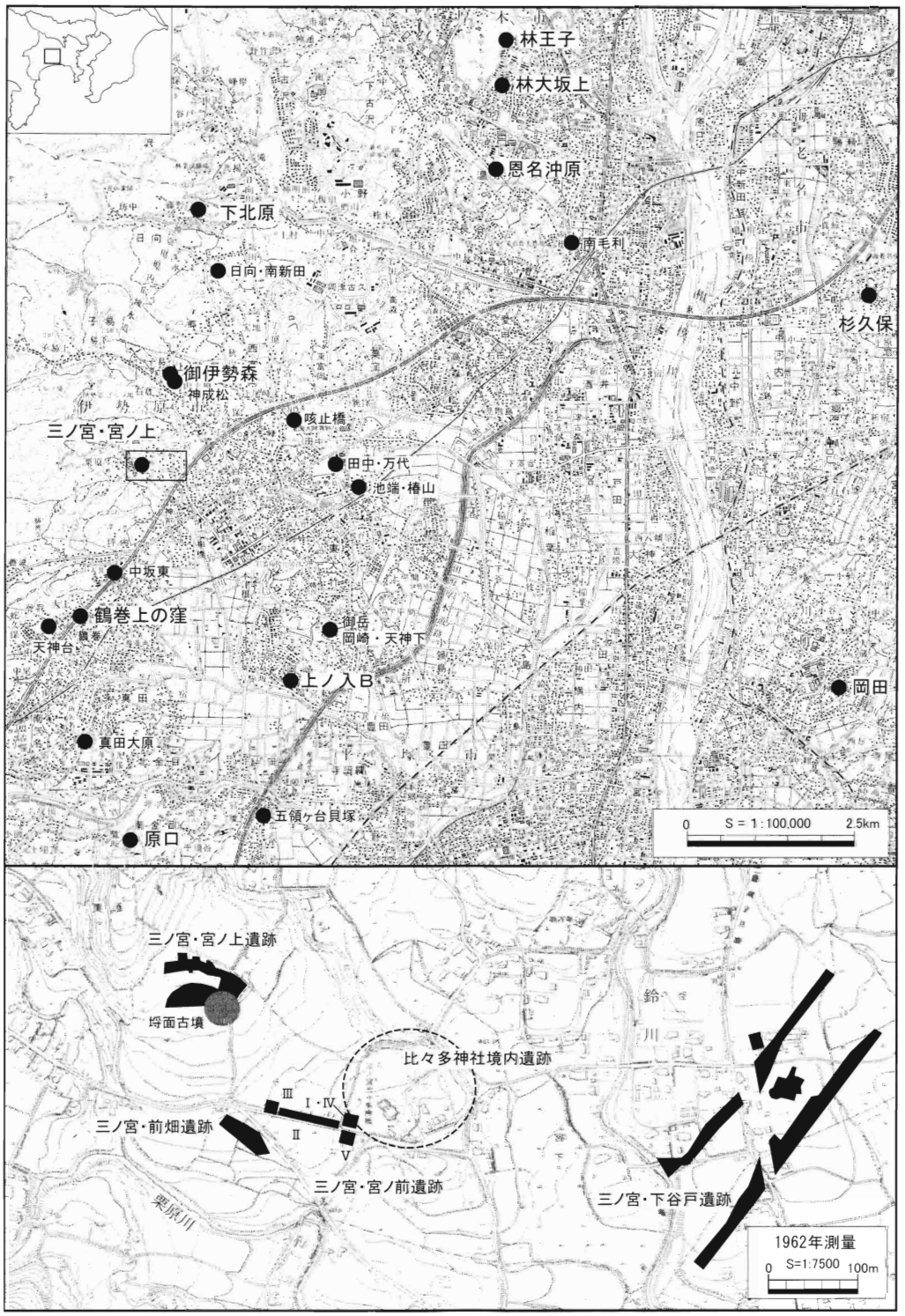
(1) 周辺の遺跡と出土地点

はじめに、神奈川県伊勢原市三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手（以下、本例）を検討する。「昭和七年二月比々多村三宮宮上発見品永井健之輔所蔵」と注記されているとおり、本例は比々多神社社司であった永井健之輔によって1927年に採集されたものであり、跡を継いだ永井参治によって付近の古墳出土品などとともに1953年に開設された宝物殿・三宮郷土博物館（現三之宮郷土博物館）に納められた。これまでに、帝室博物館発行の『石器時代土偶土版絵葉書集』(帝室博物館1930・神林1943(註2))、江坂輝弥の『土偶』(1960)、サントリー美術館の特別展図録『土偶と土面』(1969)、上川名昭の『中期縄文文化論』(1983)、吉本洋子・渡辺誠の「顔面装飾付土器の基礎的研究」(1994) など顔面把手を収めた代表的な論考・図集や、『伊勢原町勢誌』(伊勢原町勢誌編纂委員会1963)、『神奈川県史』(岡本1979) などにも写真が掲載されている。しかし、『土偶』を除きいずれも表面の紹介に留まっており、背面の蛇体装飾については他に『中期縄文文化論』で表面とは別ページにスケッチが示された程度で殆ど知られていない(註3)。しかしながら、本例に限らず、顔面把手の理解には表裏両面をあわせて観察することが重要であると考えるのでここに改めて実測図・写真を示して紹介を行なう。

周辺の遺跡

三之宮比々多神社は大山から続く山地の裾部、鈴川と栗原川に挟まれた段丘の先端標高60～65mの地点に鎮座する。その名のとおり相模国三の宮としての格式を誇る延喜式内社であり、神体とされる「うずらみか」と呼ばれる須恵器（県重文）、関東最古といわれる木造狛犬（市重文）などを伝えている。かつては一段上の段丘の埒面(らちめん)と呼ばれる地点に鎮座していたものが、天正年間に現在地に遷座したという(伊勢原市1996)。現境内およびその背後に広がる緩斜面からは現在も縄文土器（中期・後期）が採集できる。境内からは敷石住居が検出されているほか打製石斧・磨製石斧・石棒などの石器・石製品も採集され、弥生土器や須恵器、天保年間に出土した経筒などとともに比々多神社境内遺跡として知られている（伊勢原町勢誌編纂委員会1963、岡本1979、赤星1979)。

近年、境内南側の道路に沿った5箇所が三ノ宮・宮ノ前(みやのまえ)遺跡として発掘調査された(註4)。第Ⅰ・Ⅳ地点では草創期の微隆起線文土器、中期後半の竪穴住居・後期初頭の敷石住居各1軒、第Ⅱ



第１図　三之宮比々多神社の位置と周辺の遺跡

地点では配石・配石土坑各1基、第Ⅲ地点では敷石住居跡1軒・配石1基（以上、諏訪間1990)、第Ⅴ地点では後期の配石1基（立花1993）が検出されている。

また、宮ノ前遺跡第Ⅴ地点の西側約120ｍの地点では恵泉女学園園芸短期大学の実験研究棟・実習棟の建設に先立ち、三ノ宮・前畑（まえはた）遺跡として調査が行なわれ、槍先形尖頭器1点、縄文時代後期前葉～中葉の住居5件（うち敷石2軒)、加曽利B2式期の土器副葬墓を含む石棺墓9基および勝坂式～加曽利B2式の土器、ならびに弥生時代後期～古墳時代中期の住居、後期古墳の周溝などが検出された（伊勢原市教育委員会2002)。

さらに、比々多神社旧境内地として知られる標高80ｍ前後の高台には恵泉女学園短期大学建設時に銀装太刀・金銅製馬具・乳文鏡などを出土した埒面古墳が存在し（赤星1979、立花2003)、その豊富な副葬品から相武国造墓と推定されている（立花2001)。同所の近接地は近年、三ノ宮・宮ノ上（みやのうえ）遺跡として発掘調査が行なわれ、墳径40ｍという規模が判明したほか、縄文時代中期中葉～末の住居跡12軒（うち敷石2軒)、幅4～8ｍの配石遺構、集石・屋外炉跡、弥生時代後期～古墳時代前期の住居42軒、古代以降の溝中から土坑墓1基・獣骨埋納坑1基などが検出された（林原2002・2003)。詳細は未報告であるが、同遺跡調査団の林原利明氏の教示によると、この中には井戸尻式期の住居4軒が含まれている。また、正確な位置は不明だが、この埒面では先代宮司永井参治が75cmの立石（現在郷土博物館前に移設されている）を伴う敷石住居群を発掘している（西田1976)。

なお、神社の西方約400ｍに位置する三ノ宮・下谷戸（しもやと）遺跡では東名高速道路建設時に後期中葉の敷石住居・環礫方形配石遺構（小出1967）が検出され、神社本殿裏に移築されている（市史跡)。同遺跡では東名拡幅（かながわ考古学財団2000）やコンビニエンスストア建設に先立つ立会い調査[註5]でも同時期の環礫方形配石遺構を含む敷石住居群、配石墓群などが検出されているほか、草創期の有舌尖頭器なども多数出土している。

第1図上には井戸尻式期の遺構が検出されている近隣の遺跡を示した。このうち厚木市林王子、同林大坂上、同恩名沖原、伊勢原市下北原、秦野市鶴巻上ノ窪、平塚市原口、海老名市杉久保、寒川町岡田からは顔面把手が出土している。また、伊勢原市御伊勢森、岡田からは釣手土器（後述)、林王子と平塚市上ノ入Ｂからは人体装飾付有孔鍔付土器が出土している。

出土地点の検討

本例は、県史などで「比々多神社境内遺跡」出土品として知られてきたが具体的にはどの地点を指すのであろうか。手掛かりは過去の調査記録にある。

大場磐雄は研究日誌『楽石雑筆』の1936年11月29日条に比々多神社を訪れた際の記録として「(1）石器時代遺品　（イ）顔面把手二個、比々多村三の宮小字宮の上発見、一個は厚手式の普通のもの、二は小形なれど上に凹部ありて型式を異にするものなり、珍物というべし」と記しており（大場1976：300頁)、当時撮影したガラス乾板2枚が残されている（國學院大學日本

文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト 2005：ob0925・0926、第 3 図-2)。

また、神奈川県立埋蔵文化財センター所蔵の赤星直忠の研究資料（通称：赤星ノート）にもいくつかの資料に本例の記載が認められる（神奈川県立埋蔵文化財センター 1997：整理番号 15029・15047・15065・15073)。神奈川県による大山総合調査[註6]に伴う伊勢原町内の遺跡・遺物調査の一環として当時の宮司である永井参治から聞き取って記録されたものと考えられる。いずれも顔面把手の出土地を神社現境内と区別し、「旧境内」「宮上」と記している。

注記や大場・赤星の記録にある「宮上」「宮の上」の小字は現境内を含む緩斜面から、一段上がった埒面古墳近辺までを範囲とし、どちらも勝坂式土器の出土が知られている。さらに細かい地点を特定する必要があるが、赤星ノート 15029 に「旧境内　本殿あと　手づくね　模造形　冠塚　ラチメン　顔面把手など」と埒面古墳周辺であることが示唆されているほか、遺跡分布図（15050）でも「宮上」は神社北西の埒面の位置に点が打たれている（第 3 図-3)。このことから、本例は埒面古墳に近接する縄文時代中期集落の一角から出土していたと判断することができよう。同所は背後に大山を、正面に相模平野を見晴らす景勝の地である。なお、本稿では近年の調査との混同を避けるため、当面比々多神社所蔵例として記述していくこととする。

（2）顔面把手・蛇体装飾の観察（第 2 図・第 3 図）

本例は高さ 16cm・幅 15cm で、土器器体の口縁部以下約 6cm が遺存しており、土器本体の形状を推定することが可能である。口縁部は内湾し、外面は口縁部直下から縄文（直前段多条の RL）が施されている。これらの特徴から中山真治（2000）の分類によるＡ１類に属するものと判断できる。器体の全容が判明する類例としては八王子市犬目中原遺跡（第 3 図-4:渡辺 1963）があげられよう。

胎土は緻密で 0.2 ～ 0.5mm 程度の黒色粒子、長石、石英が混在する。まず口縁部をつくり、その上に球胴の顔面・後頭部を置く。次いで、頂部および左右の頭髪部（以下、部分名称は中村 1973 による)・耳部を接合していく。これは、頂部および左の頭髪部（本稿での左右は観察者側からの視点による）が顔面との間で破損していることからも明らかである。なお、頂部背面は眼鏡状突起を形成する。さらに背面に横位の隆帯を添付し、それに直交するように蛇体装飾を添付し、下部の眼鏡状突起に接続。さらにその下に隆帯を垂下させる。器面には、内外面ともに丁寧なミガキ（細い工具痕を残す）が施される。焼成は良好で、顔面・背面は極赤褐色（2.5YR2/3)、器体内面は赤褐色～にぶい赤褐色（2.5YR3/3 ～ 3/4）と、全体的に赤褐色を呈し、一部ににぶい褐色（7.5YR6/4）の部分がある。

表　面

顔面部の高さは 6.5cm、幅 7.3cm で、頭髪部を含めると高さ 10.0cm、幅 13.6cm である。顔面

は半球状に突出しており、器体および頭髪部との接合部には工具でなぞった痕が確認される。眉はその上部を削りだすことによって成形されており、両眉の中央に粘土の貼付による鼻が位置する。鼻孔は刺突による。その下部には沈線によって人中が描かれる。目は典型的なアーモンド形に、口は四角く粘土板を切り込んで形づくられている。但し、目の角度が水平に近いのは本例の特徴であろう。なお、側面図で窺えるように顔面はやや上方を向いている。

頭頂部には径約1cmの孔が貫通しており、背面の眼鏡状突起に接続している。円孔の周囲には1条の沈線がめぐる。頭髪部右側では波状の外形に従って、3つの三叉文が連続して施される。これらの三叉文部分は特に深く刻み込まれている。頭頂部円孔・顔面・耳部円孔と一体となって3つの玉抱き三叉文を形づくっているのであろう。これに対し左側上半は欠損しているが、頭頂部脇の三叉文は僅かに確認できる。下部には耳部円孔の上部に沈線による円文とそれを囲む区画文が見える。右側では耳部円孔の上がすぐに波状を呈するのに対し、右側にはそれが認められないことから、頭髪部は左右非対称であった可能性が高い。

背　面

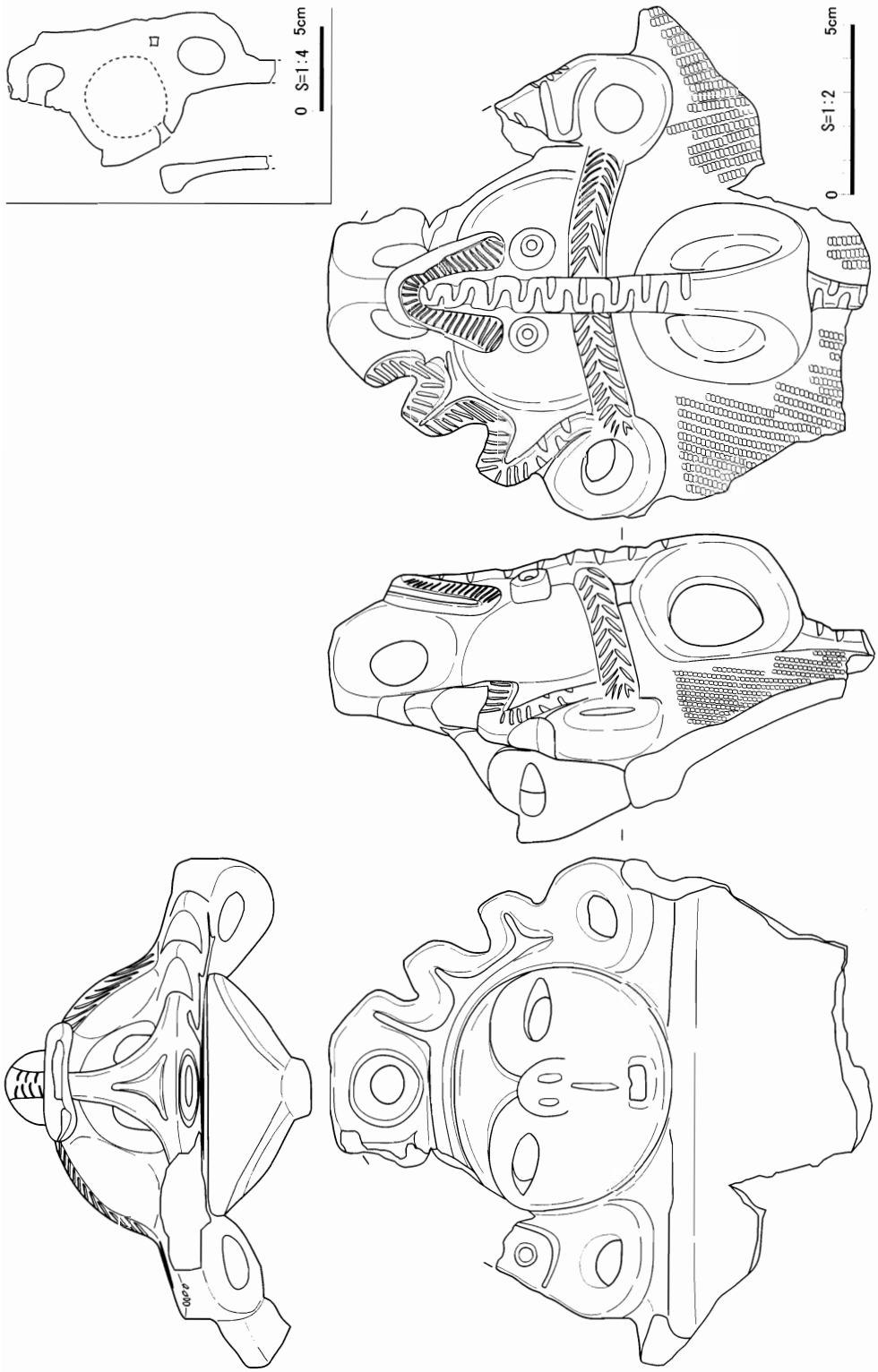
半球状の盛り上がりが形づくられ、その上に頂部の眼鏡状突起が形成される。粘土板と2本の隆帯を組み合わせることで、上面から見ると三角形のくぼみが生じるが、これを丁寧に三叉文として加工している。

中段には、左右の耳部円孔を結ぶ形で隆帯が貼られ、綾杉状の刻みが施される。蛇体装飾はこれらに乗っかる形で造形される。頂部眼鏡状突起の中ほどに、短沈線を充填させた「<」字状の頭部が配置され、その下に粘土紐による目を添付する。体部の隆帯は半球状の盛り上がりから横方向の隆帯を越えて、下部の眼鏡状突起に接続する。体部には交互刺突文が施されている。なお、下部の眼鏡状突起からさらに下方に交互刺突を伴う隆帯が伸びていく。

一方、左側の頭髪部裏面も、隆帯で縁取られており、蛇の頭同様の短沈線が充填され、円孔との接合部付近では交互刺突文に変わる。あるいは、江坂（1960）のいうようにこちらも蛇を表しているのかもしれない。右側は、表面同様の区画文らしい沈線が認められるもののモチーフは不明である。

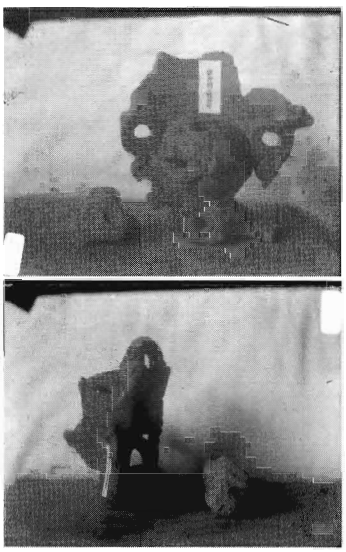
（3）帰属時期

中山真治（2000）は器形・胴部文様の判明する顔面把手35例について器形と顔面装飾を細別し、時期・地域の特徴を検討して、本例の属するA1類が関東西部に多いこと、井戸尻Ⅰ・Ⅱ式期（新地平編年9a・9b期：黒尾ほか1995）に属することを示した。また、顔面装飾の輪郭が丸みを帯びるものを2類、輪郭が蛇行し立体化したものを3類とした上で、2類を藤内Ⅱ式期古・新（8a・8b期）、3類を井戸尻Ⅲ式期（9c期）に位置づけている。本例は、その中間形態として位置づけられよう。

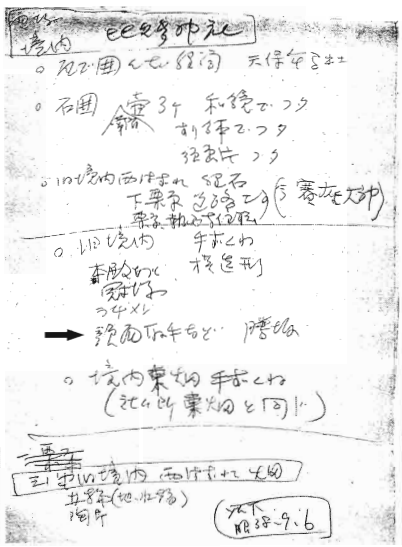


第２図　三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手

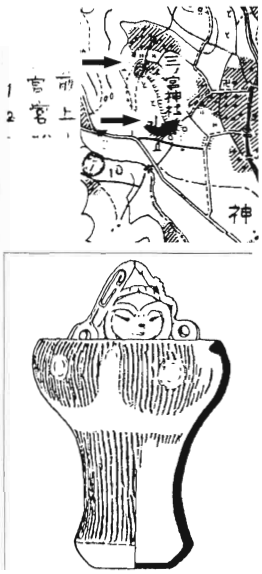
1 三之宮比々多神社所蔵蛇体装飾付顔面把手（縮尺不同）



2 大場磐雄撮影写真
（上：ob0925　下：ob0926）



3 赤星ノートの記載
（左：15029　右：15050）



4 器形参考事例　S=1:8
（八王子市犬目中原遺跡）

第 3 図　三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手（2）

次に蛇体装飾をみてみたい。本例のような頭部が「<」字を呈し、目が独立して形づくられる例は単体の蛇体把手として比較的多くの事例が知られているが（上川名 1983）、時期判断可能な器体を伴うものは少なく、岡谷市榎垣外遺跡出土の顔面把手と反対側の胴部に付された例（岡谷市教育委員会 1991）がある程度である。また、頭部に短沈線が施される例は他に例を見ないようである。中山真治は榎垣外例を藤内Ⅱ式新（8b 期）としているが、体部装飾に交互刺突文と綾杉状文を併用しており、交互刺突文のみの本例より先行する可能性がある。以上の点を踏まえ、本例は井戸尻式の前半段階に属するものとしておきたい。

2. 類似する装飾とその分布

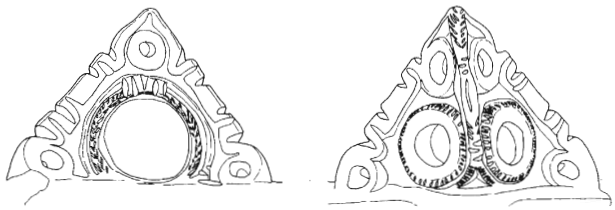
（1）顔面把手の主要モチーフ

冒頭で述べたように、顔面把手は一括して検討されることが多く、形態・装飾の分類やそれをもとにした議論は少なかった。上述した中山真治の研究は、時期差・地域差を指摘する数少ない論考である。こうした中、吉本洋子・渡辺誠（吉本 2003、吉本・渡辺 2004）は「目口鼻を欠く人面装飾」を検討し、それらが目口鼻を欠くという特徴のほか、形態や背面装飾を含めて類似性の強い複数のグループに分けられること、それらが地域でまとまることなどを指摘し、そうした一見特異な表情であっても、サイズ・分布の点で他の顔面把手との差異は認められず、むしろ普遍的な存在であったことを論じた。

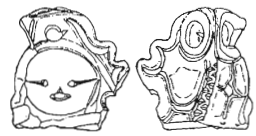
こうした研究を踏まえて、改めて表・背面の装飾を眺めてみると、いくつかの特徴的モチーフを抽出することが可能である。すなわち、表面に関しては、頭頂部の円文・三叉文・渦巻文、背面では、眼鏡状突起・蛇体装飾・円文・渦巻文・十字状文・三（二）本指文・三叉文などである。なお、蛇体装飾については本例のような明瞭なもののほか、抽象化されたものも多く、識別に困難が伴うが、永瀬史人（2006・2007）の研究を参考にここでは刻みの入った隆帯が眼鏡状突起と組み合うものは蛇体装飾として判断した。

（2）本例の類例と空間分布

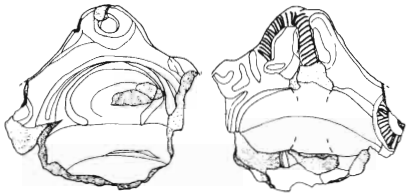
本例は、表面頭頂部は円文、背面は眼鏡状突起・垂直の蛇体装飾というモチーフの組み合わせと理解できる。では、こうした組み合わせをもつ事例は他にどの程度存在するのだろうか。報告・図録などで表裏両面を確認できる資料を検討した結果、平塚市原口遺跡、厚木市林大坂上遺跡、海老名市杉久保遺跡、横浜市上白根おもて遺跡、あきる野市二宮森腰遺跡、武蔵村山市屋敷山遺跡[註7]、甲州市釈迦堂遺跡群野呂原地区、北杜市津金御所前遺跡、富士見町藤内遺跡、岡谷市海戸遺跡の 10 例の類例を見出すことができた（第 4 図）。顔面把手全体の中では僅かな一群であるが、顔面把手を製作する際の流儀の一端は抽出し得たのではないかと考える[註8]。なお、類似した装飾をもつ土偶として、北杜市原町農業高校前遺跡の事例を挙げておきたい（第



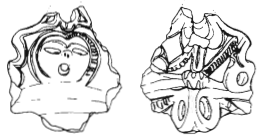
1 平塚市原口



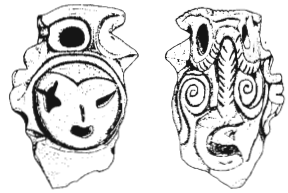
2 厚木市林大坂上



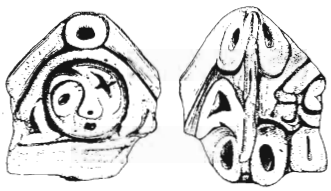
3 海老名市杉久保



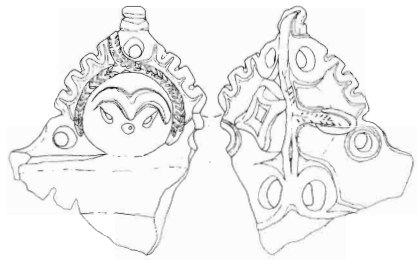
4 横浜市上白根おもて



5 あきる野市二宮森腰

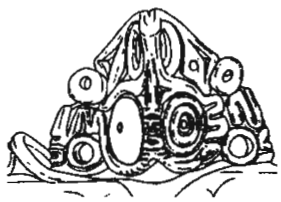


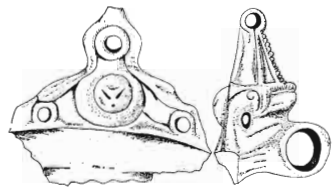
6 武蔵村山市屋敷山



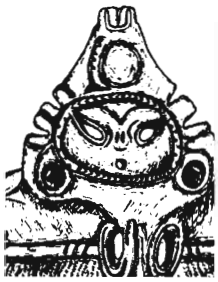
7 甲州市野呂原

8 北杜市津金御所前

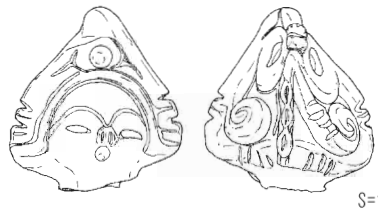




9 富士見町藤内



10 岡谷市海戸



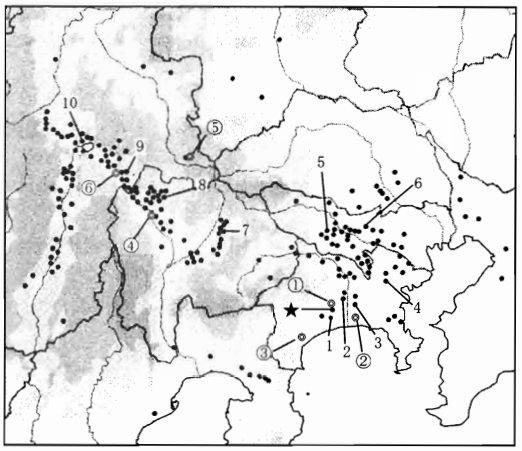
S=1:4

11 北杜市原町農業高校

第4図　三之宮比々多神社所蔵顔面把手の類例（S=1:6）

4図-11)。

これらのうち二宮森腰例、屋敷山例は「片目に傷の付いた顔面把手」(江坂 1970) であり、原口例、杉久保例は「目口鼻を欠く顔面装飾」(吉本・渡辺 2004) に該当するが、ここで抽出した装飾パターンを持つ事例以外にも認められるものなので本群の特徴とは言えない。野呂原例は、頭頂部まで蛇体装飾が上がってきている点、背面左側に十字状文が施される点で本例と異なっているが、上に伸びる蛇体に直交するもう1体の蛇体の存在は、本例背面の横走する隆帯も蛇を示している可能性を示唆する。なお、林大坂上例・二宮森腰例は上面の三叉文も本例と共通する(註9)。



・★：三之宮比々多神社所蔵例
・1～9は図4の番号と共通
・①～⑥は図6の番号と共通
・背景は小松学(2008) による顔面把手出土遺跡分布図

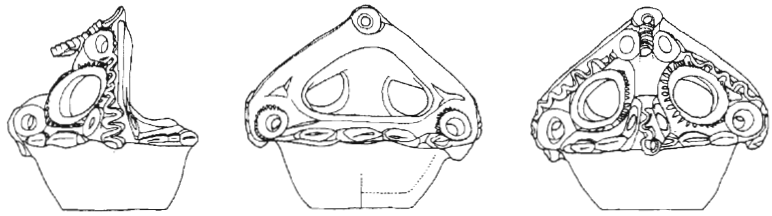
第5図　三之宮比々多神社所蔵顔面把手と類似する装飾を持つ顔面把手・釣手土器の分布

これらの分布は本例を含めて、東京都・神奈川県の西部に7例、山梨県東部に1例、山梨県西部～長野県諏訪周辺に3例となる。顔面把手全体を見ると伊那谷や松本平にも多数分布するのに対し、これらの一群の分布範囲は限定的であり、分布の密度を考慮すると関東南西部に特徴的な様相を示している（第5図）(註10)。特に、本例・原口・林大坂上の3例は、分布の上でも隣接している（第1図)。

(3) 釣手土器における類似の装飾

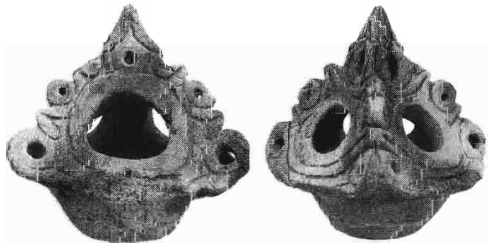
ここで目を釣手土器に転じてみたい。藤内式・井戸尻式期の釣手土器の装飾について同様の検討を行った結果、抽出されたのは伊勢原市御伊勢森遺跡例、寒川町岡田遺跡例、川上村大深山遺跡例、富士見町曽利遺跡例である（第6図)。

御伊勢森遺跡は、三ノ宮・宮ノ上遺跡の北方1.5㎞に位置し、本例と最も近い釣手土器となる。裏面が一部欠損しているものの、一見して、表面頭頂部が円文、背面は眼鏡状突起・蛇体装飾というモチーフの組み合わせを持つことを知ることができよう。隆帯は交互刺突文ではなく、刻みで装飾されているが、上下にうねる形態は蛇を示している。頭髪部は波打っていないが、背面の蛇行隆帯はその名残と考えられる。岡田遺跡も宮ノ上遺跡から相模川を隔てた南西11㎞の近距離に位置する。顔面把手の頭髪部にあたる部分に、円文が加えられていること、頭頂部円文の上に三叉文が施されているのが特徴である。後者は顔面把手の上面に見られた三叉文と関連するものであろうか。大深山遺跡例は円文が増加し、その背面に縄文が施されている。頭髪部分の円文とともに頭頂部円文上の三叉文の点でも岡田例と共通する。曽利遺跡例は既に

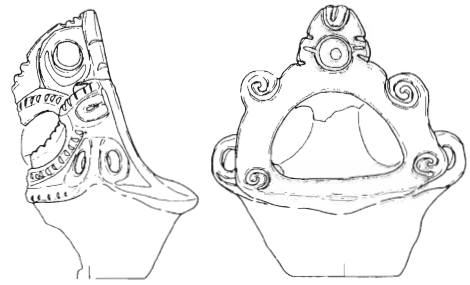


1 伊勢原市御伊勢森

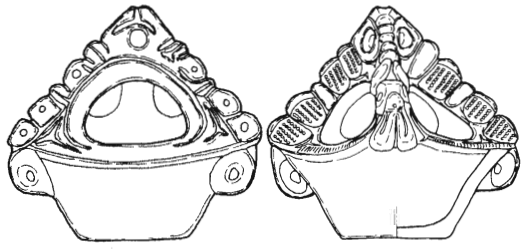
2 小田原市久野一本松



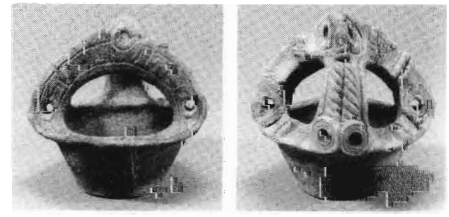
3 寒川町岡田（縮尺不同）



4 茱崎市石之坪西地区



5 川上村大深山



6 富士見町曽利（縮尺不同）

第6図　三之宮比々多神社所蔵顔面把手と類似する装飾を持つ釣手土器（S=1:6）

頭髪部の波打ちが見られないが、沈線による連続三叉文は残されている。背面中央には上下の眼鏡状突起を結ぶ形で斜めに刻みを施した2本1組の隆帯があり、これまでの諸例から蛇体装飾が変化したものと推定される。同様の装飾は背面釣手部に4箇所認められ、大深山例の釣手部円文背面の装飾の性格をも示唆している。このほか、頭頂部が欠損している小田原市久野一本松遺跡例（第6図-2)、背面下部が欠損している韮崎市石之坪遺跡西地区例（同4）も同様の文様構成をとっていると推測される。これらの釣手土器は型式学的特徴と共伴資料から井戸尻式期～曽利Ⅰ式期と判断されるものである。

さて、6例の分布は神奈川県西部3例と八ヶ岳山麓3例（諏訪・南佐久・北巨摩）であり、この分布は前述の本例類似の顔面把手の分布範囲に近いあり方を示している。神奈川県においては当該期の釣手土器の全てがこの文様構成ということになる。

顔面把手・釣手土器の一部類型の分布が類似したあり方を示すことは当該地域を考える上で重要な意味を持つと思われる。このことはまた、土器の一部とそれに関わる儀礼のあり方が、地域と密接に関わって展開していたことを窺わせるのである。

展望－顔面把手と釣手土器－

本稿では、三之宮比々多神社所蔵の顔面把手の再紹介とともに、その出土地の検討を行ない、類似する装飾を持つ一群を抽出できること、その装飾の組み合わせは同じ伊勢原市内の御伊勢森遺跡出土例をはじめとする釣手土器においても認められることを確認し、両者の分布が同様のあり方を示すことを指摘した。そもそも顔面把手と釣手土器の形態上の類似については冒頭で紹介したように鳥居龍蔵（1924）によっていち早く指摘され、八幡一郎（1937)、小林公明（1991）が続いた。これに対し、具体的に装飾上の類似に言及したのは諏訪市博物館で釣手土器展を開催した田中総（1999）である。田中は同展図録において、諏訪市荒神山遺跡の顔面把手と、富士見町井戸尻遺跡の釣手土器を並べ、読者にその共通点を探すよう求めた。第7図-1・3にそれを再掲し、筆者なりの回答を示した。即ち、頭頂部・主窓頂部の三叉文（a)、頭髪部・主窓の交互刺突文と類似する文様構成（b)、裏面頂部の眼鏡状突起（c)、中央部の十字状文とそれを分割した形態の窓部（d)、その左側の三（二）本指文[註11]（e）などである。類例として厚木市恩名沖原遺跡の顔面把手と南箕輪村久保上ノ平遺跡の釣手土器を加えておきたい（第7図-2･4)。前者では、上記a・c・d・e、後者においてもd・eの特徴が看取される。

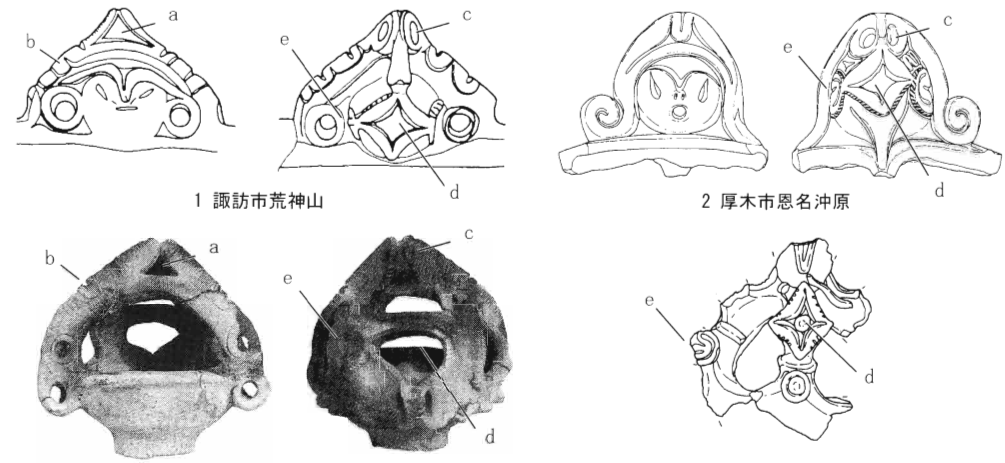
顔面把手と釣手土器で装飾の組み合わせが類似する例をいくつか挙げておこう。1つは背面の玉抱き三叉文である。もともと後頭部の玉抱き三叉文は藤内式期から続く土偶の代表的な装飾であり（今福1998)、顔面把手では数は少ないものの野呂原遺跡に目口鼻を省略したものが見られる（第7図-5)。釣手土器においては最古例とされる富士見町札沢遺跡例（藤内Ⅱ式　第7図-6）や岡谷市目切遺跡例（同7)、茅野市中ッ原遺跡例（同10)、杉並区井草八幡宮所蔵例、

三島市観音洞遺跡例（以上、井戸尻式期）など一定数の事例が粘土紐を掛け渡すことによって玉抱き三叉文を形づくっている。もう1つは、頭頂部の三叉文とその両脇の縦位の沈線文である。顔面把手では富士見町九兵衛尾根遺跡（同8）、釣手土器では同町藤内遺跡（同9）、上記中ッ原遺跡（同10）に例をみる。

縄文土器の文様・装飾が土偶と共通することは古くから指摘されてきたが、谷口康浩（1998）は土偶文様と土器文様の関係性の強弱が勝坂式・曽利式と加曽利E式とで異なっていることを指摘し、こうした関係性が土器に対する社会の指向性・認識の差異と関わるという解釈を示した。本稿で扱った釣手土器の装飾も同様の問題として位置づけることが可能である。その起源が顔面把手にあり、さらに土偶とも関係することが、装飾の組み合わせというレベルにおいて認められたのである。重要なのは、土偶・顔面把手と釣手土器の関係が一対一（器種レベル）の関係ではなく、複数の組み合わせが存在したことである。本稿ではその一端を示したに過ぎないが、三者間での具体的な関係が明らかになったことは、その性格や、釣手土器出現の経緯などを検討する上で重要な手がかりを得たものと考えられる。少なくとも今回扱った三之宮比々多神社所蔵例の類例については顔面把手・釣手土器ともに、神奈川県西部～長野県諏訪地域という範囲で重なっており、筆者の目標とする土器・地域・儀礼の関係性の把握のうち、土器と地域との関連については一定の見通しをたてることが可能となった。

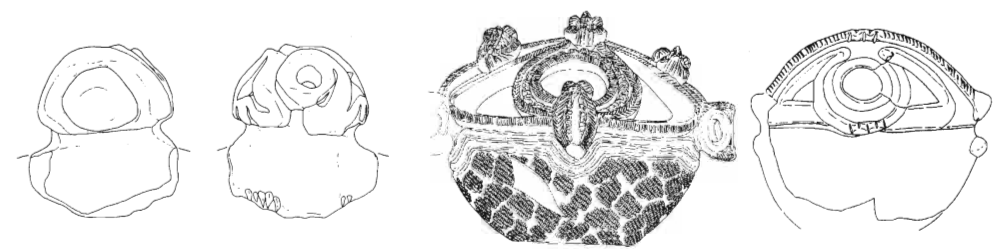
冒頭で述べたように顔面把手は器体から離れた後も単独で取り扱われた（藤森1968）。また、顔面把手に対する具体的行為として顔面の打ち欠きがある（吉本2003、吉本・渡辺2004）。その好例は本例に近接する秦野市鶴巻上ノ窪遺跡例であり顔面全面が失われている（第8図）。同じく近接する原口例や杉久保例は目口鼻を省略している（第4図-1･3）。こうした顔面把手の取り扱いを踏まえると、勝坂期の釣手土器の形態が顔面把手の顔面を打ち欠いた形態であるという鳥居龍蔵（1924）の指摘は、単に形態的な類似としてのみならず、実際の儀礼行為を踏まえた関連性として改めて評価されるべきであろう。すなわち器体から離れ顔面を打ち欠かれた球胴の顔面把手の存在が、釣手土器という新しい土器形式のモデルとなり、その装飾が受け継がれた、という推定を可能にするのである[註12]。本稿では、比々多神社所蔵例の再紹介を第一とし、近隣例をもとに論を進めた。他の顔面把手や釣手土器の関係性については稿を改めたい。

2008年2月15日～17日の3日間、伊勢原市中央公民館を会場に市内の縄文時代の精神文化に関わる資料を集めた「第21回考古資料展　縄文時代の祈り―池端・金山遺跡を考える―」が開催され筆者もそれに関わることができた（伊勢原市教育委員会2008）。そこで三之宮比々多神社所蔵の顔面把手と御伊勢森遺跡出土の釣手土器を並べて展示する機会を得た際、両者の装飾の類似に気づいたことが本稿執筆の契機である。資料の調査・公表にあたり三之宮比々多神社（永井治子氏）、三ノ宮・宮ノ上遺跡発掘調査団（林原利明氏）、伊勢原市教育委員会、並びに厚木市教育委員会、井戸尻考古館、岡谷美術考古館、神奈川県立埋蔵文化財センター、川上村教育委員会、國學院大學学術資料館、寒川町教育委員会、産業能率大学、諏訪市博物館、韮崎市教育委員会の皆様より格別の配慮を賜った。小林達雄名誉教授、谷口康浩准教授、諏訪間伸、立花実、田中総、阿部昭典、永瀬史人、徳留彰紀の各氏からは有益なご教示をいただいた。なお、本稿は筆者に与えられた平成20年度加藤建設株式会社学術奨励助成金による研究成果の一部である。記して感謝いたします。

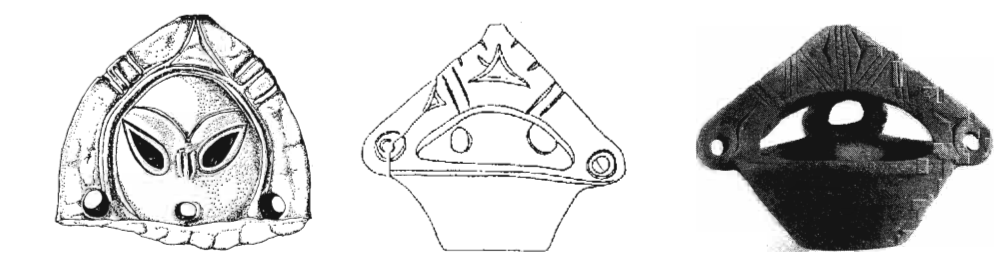


1 諏訪市荒神山　　2 厚木市恩名沖原

3 富士見町井戸尻　　4 南箕輪村久保上の平

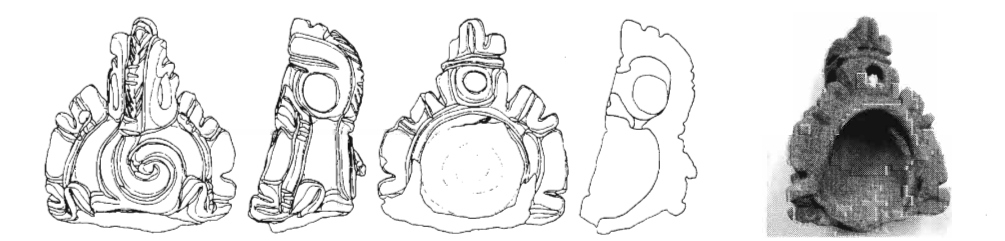


5 甲州市野呂原　　6 富士見町札沢　　7 岡谷市目切



8 富士見町九兵衛尾根　　9 富士見町藤内　　10 茅野市中ッ原

第７図　顔面把手と釣手土器の装飾パターンの類似（縮尺不同）



第８図　顔面を打ち欠かれた顔面把手（秦野市鶴巻上の窪）（S=1:6）

註

(1) 顔面把手は研究当初からの呼称であるが（江見1909、鳥居1922、江坂1960、藤森1968ほか）、近年「人面装飾付土器」（上川名1983、吉本・渡辺1994、山梨県立考古博物館2004ほか）と呼称されることが多い。しかしながら、本稿では人面装飾一般ではなく、従来概念化されてきた勝坂式後半期の一群に限定して検討するため「顔面把手」を用いる。また、土器の一部分に過ぎないものの、その部分のみ特別に扱われた可能性があること、釣手土器との形態比較においては当面把手部分のみが対象となることなどから土器器体から独立して検討することは妥当と考える。但し、顔面把手を持つ土器の性格を明らかにするためには器体の装飾・使用状況などを検討する必要があることは藤森栄一（1968）・渡辺誠（1992・1995）の研究が示すとおりである。

(2) 顔面把手12例を含むこの絵葉書集は後藤守一の企画した帝室博物館における土偶の展覧会陳列品を中心に編纂されたもので、その目録は別に神林淳雄（1943）が府県別に整理している。なお、國學院大學で所蔵する神林淳雄旧蔵資料（神林淳雄資料研究委員会2005）には本例の記録類は見られないが、長野県四つ塚例、東京都草花例、西山野例など複数の顔面把手の実測図が残されている。神林の名は従来の顔面把手研究史上には殆ど登場しないが、研究の一端は遺著『土の文化』（神林1959）に「土器の把手と土偶」として掲載されており、その中で、上記絵葉書をもとに土偶・土版の特徴を抽出した上で、顔面把手と中期の土偶の関係を課題の一つとして掲げ、顔面把手5例（中越・湯川・草花・穂坂）と土偶（広見・黒駒）を挙げて類似を指摘していることを書き添えておきたい。同様の指摘は既に上記目録にも認められる。

(3) この背面スケッチには後述する横位の隆帯上の綾杉状短沈線や頭髪部裏側の短沈線が表現されていない。

(4) 複数時期の遺跡が連続して展開するため「本来の遺跡の範囲」による区分は困難であり、近年伊勢原市では原則として、「大字」・「小字」を遺跡名とし、その小字範囲での調査順に地点名を付している。

(5) 伊勢原市教育委員会の諏訪間伸氏のご教示による。

(6) 赤星ノートによると考古部門では、大山山頂遺跡、尾根山古墳群の発掘調査と伊勢原町内出土遺物の所蔵調査が行なわれ、各発掘報告と地名表からなる報告書が予定されていた。

(7) 二宮森腰遺跡は旧称二宮神社（境内）遺跡、屋敷山遺跡は旧称村山第三小学校遺跡。本稿では吉本・渡辺（1994）の呼称に従った。

(8) このほか、頭頂部文様が渦巻文の川崎市子母口富士見台遺跡例（村田1933）や狭山市宮地遺跡例（山梨県立考古博物館2004：No.115)、横位（V字形）に蛇体装飾が施される富士見町下原遺跡例（同書：No.170）なども近似した文様構成といえる。これらの存在は、特定の装飾の組合せのみが特化していたわけではないことを物語っており、本稿で抽出した一群は、そうしたバリエーションの1種類と捉えておきたい。なお、原口・津金御所前・海戸の3例は器体を伴うが、第4図では顔面把手部のみ示した。

(9) 実測図・写真・実見等で確認できたものに限られる。

(10) 小松学（2008）の集計による顔面把手数は長野県・山梨県計219例、東京都・神奈川県計92例で、本群の割合は前者で1.8%、後者で7.6%である。

(11) 荒神山例は二本指文の付根に2本の沈線があり、背面図では三本指のように見えている。

(12) 既に小林公明（1991）は形態を根拠として、「女神の首」としての顔面把手・釣手土器の共通の性格を主張しているが、筆者は、両者の媒介としての顔面把手の打ち欠きという行為の存在を重視したい。

引用・参考文献

赤星直忠　1979「比々多神社境内遺跡」『神奈川県史』資料編20　考古　神奈川県
伊勢原市　1996「新編相模国風土記稿　三之宮村」『伊勢原市史　資料編近世2』伊勢原市（原本は1841年成立）
伊勢原市教育委員会　2002『三ノ宮・前畑遺跡』いせはらの遺跡Ⅲ
伊勢原市教育委員会　2008「第21回考古資料展　縄文時代の祈り－池端・金山遺跡を考える－」（パンフレット）http://www.city.isehara.kanagawa.jp/bunkazai/
伊勢原町勢誌編纂委員会　1963『伊勢原町勢誌』伊勢原町
今福利恵　1998「中部高地の中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶研究の地平2』勉成社
江坂輝弥　1960「顔面付土器・獣面把手・顔面把手」『土偶』校倉書房
江坂輝弥　1970「顔面把手新例紹介」『月刊考古学ジャーナル』第44号
江見水蔭　1909「珍品集」『探検実記　地中の秘密』博文館
大場磐雄　1961『大場磐雄著作集』第7巻　雄山閣出版
岡本　勇　1979「比々多神社境内遺跡」『神奈川県史』資料編20　考古　神奈川県
岡谷市教育委員会　1991『榎垣外・広畑・新井南遺跡発掘調査報告書（概報）』

神奈川県立埋蔵文化財センター　1997 「寄贈資料紹介　赤星ノート」『神奈川県立埋蔵文化財センター年報』16
かながわ考古学財団　2000 『三ノ宮・下谷戸遺跡（No.14）Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告 76
上川名昭　1973 「顔面装飾についての一考察」『論叢　玉川学園女子短期大学紀要』第 3 号
上川名昭　1983 『中期縄文文化論』奈良明新社
神林淳雄　1943 「帝室博物館発行土偶土版絵葉書集に就いて」『考古学雑誌』第 33 巻第 2 号
神林淳雄　1959 『土の文化』國學院大學考古学資料室
神林淳雄資料研究委員会　2005 「資料紹介　神林淳雄資料」『上代文化』第 39 輯
黒尾和久・小林謙一・中山真治　1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム　縄文中期集落研究の新地平　発表要旨・資料』縄文中期集落研究グループ
小出義治　1967 「縄文後期の石造遺跡群－神奈川県伊勢原町三の宮下谷戸遺跡－」『月刊考古学ジャーナル』10 号
國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト　2005 『大場磐雄博士写真資料目録Ⅰ』國學院大學日本文化研究所
小林公明　1991 「火の神」『富士見町史』上巻
小林達雄　1981 「縄文土器の用途と形」『縄文土器大成 2』講談社
小林達雄　1982 「総論」『縄文文化の研究 3　縄文土器Ⅰ』雄山閣出版
小松　学　2008 「顔面把手」『総覧縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』アムプロモーション
サントリー美術館　1969 『春の特別展　土偶と土面』
諏訪間伸　1990 「三ノ宮・宮ノ前遺跡」『文化財ノート』第 1 集　伊勢原市教育委員会
立花　実　1993 「三ノ宮・宮ノ前（Ⅴ）遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』35
立花　実　2001 「相武国の確立」『相模国のはじまり－相模地方の豪族と相模国の成立－』平塚市博物館
立花　実　2003 「埒面古墳」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』45
田中　総　1999 『縄文土器のふしぎな世界　第二章－中部高地の釣手土器展－』諏訪市博物館
谷口康浩　1998 「土偶型式の系統と土器様式－勝坂系土偶伝統と中期土器様式との関係－」『土偶研究の地平 2』勉成社
帝室博物館　1930 『石器時代土偶土版絵葉書集』
鳥居龍蔵　1924 「顔面把手」『諏訪史』第 1 巻　信濃教育会諏訪部会
永瀬史人　2006 「山梨県上野原遺跡出土の人面付土器と蛇体装飾－青山学院大学所蔵の縄紋時代未報告資料－」『青山考古』第 23 号
永瀬史人　2007 「勝坂式土器終末期の蛇体表現」『青山史学』第 25 号
中村耕作　2008a 「葬送儀礼における土器形式の選択と社会的カテゴリー縄文時代後期関東・中部地方の土器副葬と土器被覆葬－」『物質文化』第 85 号
中村耕作　2008b 「釣手土器」『総覧縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』アムプロモーション
中村耕作　2008c 「墓壙への埋納」『総覧縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』アムプロモーション
中村日出男　1973 「顔面把手（三）」『郵政考古』第 3 号
中山真治　2000 「顔面把手付土器小考－勝坂式後半の顔面装飾の付く土器について－」『東京考古』18
西田長男　1976 「神社の起源の古さ　式内比比多神社を一例に」『式内社のしおり』第 2 号
藤森栄一　1965 「釣手土器論」『月刊文化財』第 19 号
藤森栄一　1968 「顔面把手付土器論」『月刊文化財』第 61 号
藤森栄一編　1965 『井戸尻－長野県富士見町における中期縄文遺跡群の研究－』中央公論美術出版
蜂屋孝之　2008 「釣手土器の誕生」『平出博物館ノート』22
林原利明　2002・2003 「三ノ宮・宮ノ上遺跡（第 1 次）～（第 3 次）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』44、45
宮城孝之　1982 「縄文時代中期の釣手土器」『中部高地の考古学Ⅱ』長野県考古学会
村田文夫　1993 「川崎市域出土の装飾把手付き縄文土器」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 5 集
山梨県立考古博物館　2004 『縄文の女神－人面装飾付土器の世界－』
八幡一郎　1937 「釣手土器の型式」『人類学雑誌』第 52 巻第 3 号
吉本洋子・渡辺誠　1994 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第 1 号
吉本洋子・渡辺誠　1999・2005 「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究（追補・追補 2）」『日本考古学』第 8 号、第 19 号
吉本洋子・渡辺誠　2004 「目鼻口を欠く人面装飾付深鉢形土器」『山梨考古学論集Ⅴ』山梨県考古学協会
吉本洋子　2003 「顔を壊された女神」『史峰』第 30 号
渡辺　誠　1992 「人面把手付き土器の廃棄」『史峰』第 18 号
渡辺　誠　1995 「底を抜かれた人面装飾付土器」『梅原猛古稀記念論文集　人類の創造へ－梅原猛との交点から－』中央公論社
綿田弘実　1999 「長野県富士見町札沢遺跡の釣手土器」『長野県立歴史館研究紀要』第 5 号

綿田弘実　2002「縄文中期の釣手土器－長野県の事例－」『土器から探る縄文社会　2002年度研究集会資料集』山梨県考古学協会

挿図出典

【第1図】上：国土地理院1/50000地形図（1997年修正測量）、下：伊勢原市教育委員会提供

【第3図】1：筆者撮影、2：國學院大學学術資料館提供、3：神奈川県立埋蔵文化財センター提供、4：渡辺忠胤1963「八王子市中原遺跡調査報告」『多摩考古』第5号

【第4図】1：かながわ考古学財団2002『原口遺跡Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告第134集、2：厚木市文化財協会1987『厚木の考古資料Ⅰ』厚木市文化財調査報告書第30集　厚木市教育委員会、3：日本窯業史研究所1992『杉久保遺跡Ⅰ』、4：横浜市埋蔵文化財調査委員会1984『上白根おもて遺跡発掘調査報告、5・6：上川名1973、7：山梨県教育委員会1987『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集、8：須玉町1998『須玉町史　史料編1』、9：藤森編1965、10：長野県考古学会1967『海戸・安源寺』長野県考古学会研究報告書2、11：山梨県埋蔵文化財調査センター2005『原町農業高校前遺跡（第2次）』山梨県埋蔵文化財調査センター調査報告第221集　山梨県教育委員会

【第6図】1：御伊勢森中世遺跡発掘調査委員会1973『神奈川県伊勢原市御伊勢森遺跡（傳上杉定正館址）の調査』産業能率大学、2：県営岡田団地内遺跡発掘調査団1993『岡田遺跡発掘調査報告書』、3：玉川文化財研究所2002『久野諏訪ノ原遺跡群Ⅰ』小田原市文化財調査報告書第101集　小田原市教育委員会、4：韮崎市教育委員会2001『石之坪遺跡（西地区）』、5：八幡一郎1976『大深山遺跡』川上村教育委員会、6：田中1999

【第7図】1：長野県教育委員会1975『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　昭和49年度　諏訪市その3』、2：恩名沖原遺跡発掘調査団2000『恩名沖原遺跡』、3：田中1999、4：南箕輪村教育委員会1997『久保上ノ平遺跡』、5：山梨県教育委員会1987『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集、6：綿田1999、7：岡谷市教育委員会2005『目切・清水田遺跡』郷土の文化財26、8：藤森編1965、9：宮城1982、10：茅野市教育委員会1993『中ッ原遺跡』

【第8図】図：かながわ考古学財団1998『不弓引遺跡（No.21・22）、鶴巻大椿遺跡（No.23）、鶴巻上ノ窪遺跡（No.25上）、北矢名南蛇久保遺跡（No.25下）、北矢名矢際遺跡（No.26）』かながわ考古学財団調査報告32　写真：筆者撮影